

『実りを待つ』 井上隆晶牧師

ヤコブの手紙5章7～11節、マタイによる福音書13章18～23節

①【忍耐について】

ヤコブの手紙は、エルサレム教会の最初の監督ヤコブ（イエス様の兄弟）の名を借りた誰かが書いたものであって、東方正教会では福音書、使徒言行録に続いて置かれている権威のある書です。ヤコブはこの手紙の中で「忍耐」ということを繰り返し語っています。「あくまでも忍耐しなさい。そうすれば、完全に申し分なく、何一つ欠けたところのない人になります。」（1：4）今日読んだ5章でも「主が来られるときまで忍耐しなさい。」（5：7）と命じています。キリスト教信仰にとって忍耐することは、実を結ぶ者になるためにもものすごく重要なのです。

●カスタマー・ハラスメントという言葉聞いたことがあると思います。客からの暴言、不当な要求といった迷惑行為を指します。昔はそんなものはありませんでした。それだけでなくインターネットでの過度な誹謗中傷、教員に対する保護者からのクレームなど、日本社会全体が何かおかしくなっています。それについて東大名誉教授である養老孟司（たけし）さんが最近の日本人は忍耐力がなくなった、抑制の利かない人が社会の主流を占めていると語っています。「10年くらい前ですけれど、子どもの辛抱について研究してる人がいてね。パソコンの画面を見せて「こういうことがあったらボタンを押しなさい。こういうときは押しっぱなしいけない」と指示すると、子どもというのはボタンを押したがるので、押しっぱなしの場合に解答を間違えやすいんですよ。結果は、間違える割合が、当時の小学校6年生と2年生で同じくらいだった。要するに6年生なのに、2年生くらいの辛抱しかできなくなっているという結論が印象的でした。」

宗教法人を獲得するのに5年かかりました。大阪府庁に10回以上通いました。何度も宗教法人規則について役員会で協議して作成しましたが、教団から教団本部の規則に合わせるように言われ作り替えました。最終的に提出する前に、府庁に電話をすると「教団の登録印（実印）でないと駄目」と言われ、角印でしたので、もう一度教団本部に実印を貰うために書類を送り返しました。いざ明日、提出という時に教区事務所の職員が風邪で休み、一週間伸びました。さていよいよ提出という時になり、教団から「まだ必要な書類が一枚届いていません」と言われ、急いで提出しました。これでもか、これでもかというくらいにストップがかかりました。ここまできるともう腹も立ちません。私は「もう何が起こっても平気だ、いつまでも待つし、できるまで食らいついてやる」という気持ちになりました。私はカルト宗教の説得と、教会生活と、宗教法人の取得で「忍耐」することを訓練されました。信仰生活は一言でいうと忍耐です。忍耐は学ぶものなのです。

②【実を結ぶためには、春の雨と秋の雨の二回が必要である】

ヤコブはキリスト教徒の生活を農夫にたとえて語ります。「主が来られるときまで忍耐しなさい。農夫は、秋の雨と春の雨が降るまで忍耐しながら、大地の尊い実りを待つのです。あなたがたも忍耐しなさい。心を固く保ちなさい。」(5:7~8) パレスチナでは畑に種を蒔き、10月~11月の秋の雨を待ちます。雨が降ると芽が出て育ち始めます。更に4月~5月の春の雨が降ると実が熟して収穫することができます。このように二回にわたる天からの雨を待たねばなりません。信仰生活にも同じことが言えます。聖霊の働きによって信仰告白をし、信仰が芽生えても、何度も聖霊という雨を受けなければ実とは結びません。12使徒たちも何度も聖霊を受けています。ヨハネ20:22「彼らに息を吹きかけて言われた。聖霊を受けなさい。」、使徒2:4「一同は聖霊に満たされ、霊が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。」、使徒4:31「祈りが終わると、一同の集まっていた場所が揺れ動き、皆、聖霊に満たされて、大胆に神の言葉を語り出した。」など聖霊降臨は何度もあります。

また「実」についても、聖書の中には多くの言葉があります。「偽預言者を警戒しなさい。…あなたがたはその実で彼らを見分ける。…すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ。」(マタイ7:16,17) この場合の実とは「言葉と行い」です。聖霊という雨が私たちの中に降ると品性ともいうべき実を結ばせます。

「霊の結ぶ実とは愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です。」(ガラテヤ5:22~23) そしてやがて身体は変容し、「栄光から栄光へと主と同じ姿に造りかえられていきます。これは主の霊の働きによることです。」(IIコリント3:18) とあるように、キリストに似た者という実が結ぶのです。

③【労働と恵みのバランスが収穫には必要であること】

●「これから始めようとする新しい生活は、しばしば農夫の生活にたとえられた。耕される土も種も、太陽の暑さ、雨、野菜を成長させる力と同様に、すべては神の賜物である。しかし、労働は農夫に任される。農夫は早朝から夜遅くまで、草取りをしたり、鋤をかけたり、水をやったり、刈ったりしなければ、豊作を望むことはできない。農夫は常に働き、常に目覚め、常に警戒し、常に対策をこぎずる用意をしておかなくてはならない。しかし、最終的には、収穫は天気と気候、すなわち神によるのである。私たちの耕そうとする畑は私たち自身の心である。収穫は永遠の命である。」『行者たちの道』より

収穫を得るには「神の恵みと人間の労働の二つ」が必要なのです。そのどちらが欠けても良い実を結ぶことはできません。詩編65:11にも「芽生えたものを祝福してくださるからです」とあります。芽生えただけでは実とは結びません。そこに神の祝福が加わる時、大地のものは実を結ぶのです。「神の恵みと人間の労働のバランス」が必要です。いくら天から雨が降っても、種を蒔いておかなければ、どうやって芽が出るのでしょうか。労働は神の命令です。私たちの労働とは聖書を

読み続けることであり、自分の心を耕すという祈りであり、語り続けるという信仰生活です。

イエス様は種蒔きの譬えで、み言葉を聞く人間の心の状態がどんなであったとしても、神の言葉である種を蒔き続けることの必要性を語りました。道端の種も、石地の種も、茨の中に落ちた種をすべて無駄になりました。実に75%が無駄になるのです。いくら聖書を読んでも、祈っても、いくら良い説教を聞いても75%は無駄になるのです。しかし人生の試練によって心が耕された時、一つの神の言葉が芽を出し、何十倍にも増えて実を結ぶのです。それに賭けるのです。75%が無駄になることを恐れてはいけません。そんなもんだと思う事です。私は一つの願いの為に43年祈って来ましたが、まだ叶えられません。しかし必ず時が来たら実を結ぶことを信じています。できることはすべてやり、後は神の聖霊を待つのです。やるべきことをやり尽くした人間だけが、神を本当に期待するようになり、やがて豊かな収穫を得ることができるのです。

●大阪東十三教会の前牧師である浦上結慈先生の叔父さん、浦上三郎さんは、最初、キリスト教に対して拒否感情をむき出しにしていました。しかし連夜にわたる伝道集会に誘われ、その最終日に出かけていって一夜のうちに劇的な回心をしてキリスト者になりました。その後、牧師になろうとして神学校に入りましたが、学業半ばにして血核、続いてカリエスを併発して牧師を断念。実家の愛媛県に帰って養生しつつ、老いた父の看護を受けていました。隣には長男夫婦が暮らしていました。しばらくして長男夫婦の長女が結核で死んでしまいました。長男の嫁は、娘の病気が義理の弟である三郎の結核がうつったと信じ込み、何かにつけて冷たい仕打ちをするようになりました。この時から、三郎叔父は兄嫁の救いを祈り始めました。結局、兄嫁が受洗したのは三郎叔父が召されて五年後のことでした。祈り始めてから実に45年が経過していました。やがて時がたち、あんなに三郎叔父を嫌っていた叔母が召される前に、浦上牧師が見舞いに行くと「ありがとう…」と言われました。ああ。叔母さんは三郎叔父さんを赦してくれたのだと、涙が先生の頬を伝わりました。

神の言葉は生きていて、長い年月をかけて人の中で成長し、実を結ばせるのです。神は誠実な方です。私たちの労働が無駄になることは決してありません。だからこそ忍耐して祈り続け、神の言葉を聞き続け、語り続け、待ち続けましょう。